

A-2. 健常児における日本語長音のカテゴリ知覚の 発達：長音の意識と表記法との発達の関連

○大木衣里子¹⁾ 原 恵子²⁾ 飯高京子²⁾
進藤美津子²⁾ 荒井隆行²⁾

¹⁾江東区こども発達センター「CoCo」 ²⁾上智大学

【目的】多くの子どもは就学前に自然に平仮名読みを獲得し始める。平仮名読みの獲得には、どのような能力が必要であろうか。先行研究で、音韻意識は平仮名読みの発達の基盤であることが示されており、読み障害児の音韻意識の弱さも指摘されている。さらに、読み障害児の中に音声知覚に問題を示す例があり、音声のカテゴリ知覚が弱い例もある。健常児の特殊拍のカテゴリ知覚と読みとの発達の関連について、促音、拗音、撥音の知覚は、読みと発達の関連があることが示唆されてきたが（金子，2000；渡邊，2001；根津，2002）長音の知覚と読みとの発達の関連については、まだ研究されていない。そこで本研究では健常児の日本語長音のカテゴリ知覚と読みとの発達の関連について調査する。

【対象・方法】東京、神奈川の保育園年中34名（平均4：11歳）、年長36名（平均5：11歳）、小学1年26名（平均7：1歳）、2年29名（平均7：11歳）の計125名に①長音のカテゴリ知覚課題、②積木を用いた長音のモデル構成課題を実施し、読字可能な児のみに、③長音を含む単語の表記選択課題を実施した。また、健常成人25名（20～57歳、平均28.2歳）に、①長音のカテゴリ知覚課題のみを実施した。課題はすべてパソコンで呈示した。

【結果・考察】長音のカテゴリ知覚課題は年中とすべての群間、年長と小2、成人群間に有意差が認められた。よって、長音の知覚能力は年中から年長にかけて大きく発達し、年長から小2にかけてさらに緩やかに発達することが示された。そして、小学1、2年になると、成人の知覚とほぼ同様となることが示唆された。

長音のカテゴリ知覚課題と積木を用いた長音のモデル構成課題、長音のカテゴリ知覚課題と長音を含む単語の表記選択課題にはおのおの相関がみられた。よって、長音の知覚能力とモデル構成能力、長音の表記法習得には発達の関連があることが示唆された。